

新・第2話「湖のまなざし」

——その夢には、音がなかった。ただ、水の気配だけがあった。

夜更け。

ひとつの夢が、私を包んだ。

湖だった。

波は立たず、風もなく、ただ静かな鏡のように横たわっていた。

その水面には、何も映っていない。私の姿すら、そこにはなかった。

私は湖のそばに立っている。自分のからだで立っている。

足の裏が冷えるわけでもなく、空気が肌をなでることもない。

ただ、そこに“視線”だけがあった。

水が、私を見ていたのだ。

湖の奥底から。

深く、ずっと深く、何かがこちらを見上げている。

それは、忘れていた記憶だった。

動作法を学び始めたころ、はじめて「背中の中の部分を押し」と言われた瞬間——私の背中のどこがどうなっているのか、まるでわからなかったあのときの私。

その私が、湖の底にいた。

まばたきもせずに、私を見ていた。

言葉もなく、ただ沈黙のまなざしだけで。

私はその視線に導かれるように、静かに膝を折り、

湖面に手を添える——その瞬間、ぽちゃん、と一滴の波紋が広がった。

そこに現れたのは、ぼーちゃんだった。

いつものように、堂々たる風格で私のそばに座り、

何も言わず、ただ湖を見つめていた。

やがて、金の風が吹き、アビイちゃんが現れる。

彼は水面を歩きながら、薬草のような葉をくわえていた。

夢の中でも、彼は薬師だった。

最後に、ビオラが跳ねた。

水の中から、まるで矢のように飛び出し、

私の胸に、小さな水晶のような珠を落としていった。

それは、私の声だった。
なくしたと思っていた、ほんとうの声。
この湖に沈んでいたもの。

そのとき、目が覚めた。

まわりには猫たち。
耳の先がぴくりと動き、夢の名残を感じている。

私は起き上がり、水晶を握った手を胸に当てる。

声にはならないけれど、深い息が動いた。
夢の中で交わされた視線は、
今もどこかで、湖のように、私を見つめている。